

レフェリーレポート

平成31年2月25日

小川 拓海

1 参加大会

2019年度 九州ハンドボール協会審判員研修会

平成31年2月23日（土）～2月24日（日）

会場：2月23日（土）霧島市国分公民館

2月24日（日）ソニーセミコンダクタマニュファクチャリング(株)鹿児島 TEC 体育館

2 審判会議での確認事項

●九州審判長福島亮一氏

1 日目

〈PPTを使用した「モダンハンドボール」への審判員としての目標を講義形式で実施〉

2020年東京五輪までのハンドボールの競技発展として、“競技のスピード化”が求められる。そのため、選手への影響度の少ないプレーは競技スピードを落としてしまうことから、今までは罰則を示していたものも、“流す”ことが必要になる。

そこで必要になるのが、レフリーの口頭での当該選手への注意となる。ここでの注意は、今までの**警告と類似する意味**を持つ。そのためレフリーには試合を牽引していくための「リーダーシップ」が求められる。それを示すためには、自分の担当する試合だけでなく「会場に入ったときから審判員としての役割が開始されている」という意識を持つことが重要となる。

〈オープンブックテストを用い、ルールの運用を競技規則何条何項に記載があるかを記入する形式で確認〉

海外の試合において、チーム役員は豊富なハンドボールのルールを備えている。よって、**審判員はそれを上回る知識を持っていなければならない**。また、吹いた笛のひとつひとつにどの条文を根拠として吹いているかを意識していなければならない。（雰囲気で笛を吹かない。）そのために必要な準備として、日々競技規則を読み返す、競技規則問題集を解きなおすなどの努力が必要である。

2 日目

〈MO（マッチオフィシャル）TD（テクニカルデレゲート）研修〉

MOは試合における運営・管理（試合会場の照明の強弱から試合の中止の判断まで様々）に関わり、試合の間は必ずコートにすることが必要である。

TDやタイムキーパーの判断の最終責任はMOにあるため、ハーフタイム中も運営・管理の例外ではないといった認識が必要である。

その上でTDやタイムキーパーはレフリーを助ける任務を負っている。レフリーがゲー

ムに集中して全力で臨めるようにするため、より多く連携を取りサポートすることが求められている。レフェリーとオフィシャルが一丸となって取り組むことで素晴らしいゲームが完成する。

〈実技研修で正しい位置取りの方法を指導〉

2019 年度の上級審判試験実施者を中心に、参加審判員を 3 グループに分け（1 グループ 10 人程度）それぞれでレフェリングを実施した。外から見ている指導役がゲーム中のレフェリーにアドバイスをする。レフェリーはオンタイムで指導されることで、即座に位置取りの修正が出来た。

特に意識することは、「プレーを観察できる位置を取ること」である。吹き逃しをなくすことが出来るうえに説得力を加えることが期待できる。また、選手の視野内に入ることで選手は「見られている」感覚を得るために、反則をしないことや選手との信頼関係を築くことが出来る。これらは先述の「レフェリーのリーダーシップ」が必要になる為、日頃からの研鑽が必要不可欠である。

4 他のレフェリーを観察して

今回の研修では、各県からD級レフェリーから日本リーグレフェリー、若手からベテランまで様々なレフェリーが集った。各レフェリー5分～10分で交代する方法を取ったため、普段とは違う難しさを感じていたと思うが、落ち着いてゲームに臨むことや潔く判定するなどそれぞれのペアで長所が見られた。逆に、プレーの予測や位置取りの遠さなどが共通の課題として挙げられる。加えて、ゴールインをした後にボールから目を切っていること、時間を止めた後・得点が入った後に電光掲示を確認する…などといったレフェリーとして本来基本となる動きも習慣づけられていないことが露呈したため、日頃からの意識付けが重要かも再認識させられた。

5 今後の課題

- ・担当するゲームの流れをいち早く理解し、技術面や戦術面を鑑みてレフェリングをしていく
- ・「説得力のある笛」を吹けるよう、位置取り、タイミングを研究する。
- ・他のレフェリーの試合も観察し、自分たちには無い判定の引き出しを増やす。

6 終わりに

研修で得た「モダンハンドボール」への審判員としての取り組みを、レフェリーが実践の場でどれほどにチャレンジしていけるかが、今後の競技面の発展にも関わってくる。

ゲームをするのは選手でありチームだが、レフェリーも一つ一つの判定が競技を発展させているという意識を付けなければならない。そのためには、ゲームに臨む上での見えない一つ一つの準備が非常に大切であると感じた。